

境界線上の天照

—甘夏—

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

境界線上のホライゾンの世界で、「大神」の筆しらべを使う主人公「甘上 玉」が何かと頑張る話

筆者は原作全巻読了しています

目次

| | | |
|----|-----------|----|
| 一章 | エセ大神の開始地点 | 1 |
| 二章 | 鍛錬の走者達 | 6 |
| 三章 | 事務所前のガチ殴打 | 12 |
| 四章 | 不穏への参入者達 | 18 |
| 五章 | 次代の受け継ぎ手 | 23 |
| 六章 | 筆の操り手 | 29 |
| 七章 | 危険からの逃亡者 | 32 |

一章 エセ大神の開始地点

風が吹き荒れる海を八つの巨大な影が過ぎていく。その影を生む準バハムート級航空都市艦『武蔵』は世界各国から暫定支配を受けている極東の数少ない自治領であり、八隻の航空艦から成る全長八キロ以上の巨大な航空艦である。

その一つである中央前艦の武蔵野。その艦橋前には表示枠を多重に表示して作業を行う光景がある。

そこで主に作業を進めているのは黒髪に侍女服の自動人形で武蔵総艦長である『武蔵』。総艦長として武蔵全体の管理を行う彼女は他の自動人形よりも処理能力が高く設定されている。そんな彼女にとって艦橋前から武蔵野全体を見渡すことは視覚による情報収集や各所の点検に向けた準備を兼ねていて、今日も変わらず武蔵各所の自然物のメンテナンスを行っていた。

「玉様。間もなく授業の開始時間です。以後の仕事はこちらで行えますー以上」

「Judge. じゃあ撤収するね。先生怒らせるとやばいから」

呼びかけに答えるのは下着姿の女性。武蔵とは正反対の白髪を肩まで伸ばし、片手には筆を持っている。玉が幼い時から付き合っていた武蔵にとって、彼女が下着姿でいることを注意するのは意味の無いことだと理解していた。そんな彼女が犯罪に遭遇しないのは母親に犯罪予備軍が誰も相手できないからだ。

それに最近行っているケンカと称した戦闘訓練ではオリオトライト刃を交えている。それを見た酒井曰く、「あれは人のするケンカじゃないよ」とのこと。そんな力強いところも良いのですが。

ふと彼女がさつきまで作業をしていた場所に目をやれば、表示枠に丸や直線が描かれている。傍から見ればただの落書きにしか見えなはいそれはやがて淡い光を放ち始め、表示枠が砕けた。その表示枠から拡散していく流体光は武蔵の各所へ散らばっていき、草花や木々に浸透していく。そうして光が吸い込まれた植物は無駄な枝や葉を

自然に落としていき、枯れかけていた花はなんの前触れもなく美しさを取り戻していく。

あの母にしてこの子あり。この一連の光景が筆を持つ少女、甘上玉あまがみたまの術式が起こしたものだ。武蔵は知っている。総長の奇行に慣れている武蔵からしても初めて見た時は驚いたのだが、今では武蔵八艦の初期メンテナンスや植物への手入れなどその力を借りることが多くなっている。

*

「いつもありがと。武蔵さん」

武蔵さんから渡された表示枠の最後の一枚に筆を走らせて振り向けば、いつもと変わらず制服を持ってくれている。それを各部のハードポイントに接続すれば極東式制服として相応しい格好だ。でも私も一人の女性。喜みたいにいかないが少しは魅力を出していきたい。三河に着いたら母さんに見てもらおうかな。

そんなことを考えていると、武蔵さんから鋭い視線が飛んでくる。

「お急ぎ下さいー以上」

痛い。視線が痛い。あれは早くしなきゃいけないやつだ。

「創作術式『筆しらべ 零式』起動」

音声認識によって握っている筆が淡く光を発し始める。穂先には加工された流体が墨のような黒色で集まっていく。

甘上一族に伝わる創作術式『筆しらべ』は空中に特定の円や線を描くことで流体を用いて自然現象を再現させる術式。甘上一族では『筆しらべ』と呼ばれるそれは水や草花、風や雷、日と月の満ち欠けを疑似的に操ることもできる。本来ならば神との契約や代演と複雑な条件が付くけれど、私を使う零式は出力が低かったり一部制限を掛けている。そうすることで複雑な過程を飛ばしているけど、代演や契約をすべて行った母さんの筆しらべは桁違いに強力で、昔に発生した巨大な怪異を浅間神社と協力して御祓いたらしい。

「じゃあ行ってきます」

「行ってらっしゃいませー以上」

武蔵さんに背を向け、教導院前の大階段を視界に合わせる。ここから大階段までをつなぐように私の体とを結ぶ線を走らせる。そして筆しらは空中に静止したままその印通りの力を発揮した。

描いた印は「咲花」。視界に移る範囲内で対象と目標を結ぶ線を生成でき、主に移動手段や物の固定に使える筆しらべで、流体の続く限りは線を生成し続けられる。

描いた線は太くしつかりとした線へと変化して私の体を固定する。締め付けがきついのが難点だが外れることはない。これを使えば艦橋前から教導院までノンストップで移動できるだろう。

* 「良い仕事をしたと判断しますー以上」

武蔵は教導院前に飛んでいく玉を連続撮影しながら一息をつく。

・武蔵：『玉様の御写真と映像を入手しました。配布しますー以上』

● 画：『さすが武蔵ね。言い値で買うわ』

・武蔵：『judge. 取引成立ですね。ではー』

* 「じゃあ体育を始めるわよー。とりあえず欠席者は……正純と馬鹿だけね」

教導院前には幾らかの人が集まっている。その集団は武蔵アリアダスト教導院の三年梅組。玉が所属するクラスで、彼女の師匠である真喜子・オリオトライが担任を務めるだけあって個性的な学級である。そんな彼らの前に立つオリオトライは出席簿を片手に欠席者を確認している。

「えつとおー、ナイちゃんが見るにタマタマも来てないかなー」

「大丈夫よマルゴット。武蔵に世話されてるだけで、もう来るわ」

そこで声をかけたのは武蔵第三特務マルゴット・ナイトと第四特務マルガ・ナルゼ。彼女たちの手元には玉の着替えを写した表示枠があるが全員が見て見ぬふりをする。それは某総艦長の職権乱用による一品だと皆が理解している証である。中には既に表示枠で取引を始める会計がいたりもするが。

そんなナルゼの言葉とともにオリオトライの前に突如一凜の花が咲く。桃コノハナと呼ばれる桜色の花はその中心から蔦を勢いよく射出して対象を固定する。皆が驚く間もなく、その対象はすぐに飛んできた。

「武蔵総艦長補佐、甘上玉。到着しました！」

*

桃コノハナから抜けた先には長剣を携えたりアルアマゾネスこと、我らが担任オリオトライがいる。

「あー。先生怒ってる?」

「武蔵の手伝いなら文句ないんだけど、遅刻ギリギリはちよつとね」

「長剣で素振りするのが「ちよつと」なのか!？」

一同の叫びに、うるさいわね。と先生は言うが、ここは従っておこう。ぶつちやけ武蔵各艦を繋ぐ連結縄で行う『今年一番の波が来たぜ』ごっこが楽しみなのだ。ここで吹き飛ばされるのは大問題である。

「ま、いつか。じゃあ体育を始めるわよー」

先生が姿勢を正してこちらを見る。こうしてちゃんとしていれば体育会系教師として十分なのだが、行動が危険だ。

「ルールは簡単。先生今から品川にあるヤ「地上げ業者」……ナイスよ玉。とりあえず業者をぶん殴りに行くから。そこまで着いてくること。そこからは実技で」

その言葉に集団の中で言葉が生じる。

「先生と彼らに何か関係が?」

その疑問は当然だ。だからその場に居合わせた一人として発言しておく。

「Judge. 先生とこの前焼肉食べに行ったんだけど、そこで先生が地上げに遭ってね……」

「あら、別に気にしてないわよ。単純に何かをぶん殴れば運動になるでしょう? 運動は体育だから何も問題ないわよ」

「大アリだよ!」

皆のツツコミに先生は悪びれる風もない。私は先生のアマゾネ

スつぷりはもう極まっているのだと久しぶりに思い出した。

「まあそれは置いておいて。私が着くまでに攻撃を当てられたら、出席点を五点あげるわ」

その発言に私を含め皆の空気が変わった。

「分かる？ 授業を五回サボれるの」

「先生、攻撃を当てれば良いので御座るな？」

そう言っつて質問するのは武蔵の第一特務である点像・クロスユナイト。第二特務である半竜のキヨナリ・ウルキアガも一緒だ。

「戦闘系は細かいわね。別にそれで構わないし、手段も問わないわ」

その言葉に二人が顔を見合わせ、再び前を向く。

「ちなみに先生。触ったり揉んだら減点する箇所はあり申すか？ 逆に高得点の場所とかー」

「あはは、最初に死にたいのはお前ら二人か？」

長剣を二回三回と素振りする先生に二人は俯いた。まあしようがないって。

そんな二人を他所に、先生は皆に問う。

「あんた達、これからどうしたいの？ 各国に配られた聖譜の更新は今年で更新が止まり、末世が来ると言われてる。そんな時代に生きるあんた達が何をしたいのか。ちよつと考えてみなさい」

その言葉と共に、先生は跳躍した。授業の開始である。

二章 鍛錬の走者達

跳躍するオリオトライに対して生徒の動きも迅速だった。戦闘系の点像やウルキアガはオリオトライを追いかけ、マルゴットなど援護ができる生徒は術式の準備を始めている。非戦闘員の鈴はマツチヨヘルムのペルソナ君が肩に乗せている。そんな各自の動きは今までの経験から導き出される行動で、散々オリオトライに負け続けているからこそ生まれるものだ。

そんな中で私も術式を展開する。本来は環境に作用する筆しらべだが、十年前から自分の肉体にも使えるよう訓練を行ってきた。そしてそれは一年前によく結果を出した。その筆しらべは『一閃』画龍』の二つ。

一閃は切断に特化した筆しらべ。筆を走らせた場所に斬撃が走る術式で穂先から一メートル程度ならば斬撃を飛ばすこともできる。それでも限界はあり神格武装などの強力な能力を持つ武装には適わないのが分かっている。

二つ目の画龍は治癒や修繕に特化した筆しらべ。数メートルの建造物やちよつとした傷ならば即座に直すことが出来る術式で、戦場の援護で活躍する術式になっている。

「イツスン、来て」

走り出しと同時に発した呼びかけ。その声に反応したのは肩上のハードポイント。そしてそこから出て来たのは二頭身サイズで腰に刀を差して玉虫の様な兜と緑の衣を纏う少年。それは私の走狗で術式の仲介を行ってくれるパートナーであるイツスンだ。

『はあ、今日もあの教師とやるのかよ。ここ最近一度も攻撃当てられてないんだぞ?』

そう言ってくるイツスは呆れ気味だ。イツスンの言う通り授業内で先生に私の攻撃が通ったことは無い。それは今日も変わらないだろう。でも。

「拗ねるのは分かるけど今日は違うから。それに、とりあえず追いつかなきゃ。身体強化の術式いける?」

『そいつは楽しみだ。代演はサクヤの姉ちゃんとの会話一時間と絵画の奉納でいけるぜ』

「Judge. それじゃあ、お願い」

『あいよっ！』

イツスンが腰の刀『電光丸』を振り抜くと、術式が発動し脚力にブーストが掛かる。素の脚力では点像やアデーレには劣るが強化していればその遅れも取り戻せるはずだ。

*

梅組の授業が接近すると、武蔵住民達はほとんどが家の中へと入り騒ぎが収まるのを待つのだが、一つだけ営業を続ける店があった。

【青雷亭】と看板に記されたそこは女主人が元侍で食い逃げには刃傷沙汰も辞さないことで有名だ。そんな店内に立つのは一人の自動人形。P-O1sと呼ばれる彼女は今日もカウンターに立っている。

「雑音は気にしないでいいけど、大事なかつたかい？」

「Judge。」

P-O1sからの答えに店主は満足気な笑みを浮かべる。

一年前、店先にたたずんでいたP-O1sの身元引受人となり今では店員として雇っている。最近では朝食のレパトリーも覚えてきているし、自分のレパトリーまで考え出している。

「お客様に『心こもってない?』と言われる以外は特に何も」

「そうかい。ならとことんやりな。何事も反復練習だよ」

カランコロン。P-O1sの様子を見て厨房に入ろうとする
と、玄関を開く音がする。

…… 梅組が来るつてのにご来店とは中々根性あるじゃないか。

そんな相手は誰だろうかと思ひ、視線を玄関へと向けると、そこに居たのはよく見知った人物だった。

「久しぶりに来たけど、元気にやってる?」

「珍しいじゃないか。あんたがここに来るなんて」

のほほんと眼前で片手を降ってくる姿はこちらまで気が抜けてしまふ。

浅間神社の巫女服を着崩して入店するのは一人の女性だ。そこま

で高くない身長と背中まで伸ばした黒髪を揺らして窓側の席に腰掛けている。

「店主様。あちらの方は……」

「あなたは会ったことないんだっけ。昔からの知り合いでね。神格武装『筆しらべ』の正当な使い手、甘上咲だよ」

*

先陣を切った従士のアデーレを筆頭に点像やウルキアガもオリオトライに攻撃を通すことが出来ないうでいた。梅組の中で近接戦闘をこなせる者は大半がリタイアしている中で、オリオトライに最も近いのは玉だけだ。

……近距離で頼れるのは玉くらいですよ。

しかし玉の強化術式はまだ発展途上で、オリオトライに一撃を通すのは難しい。どうするものかと思案していると、後ろから声がかかった。

「あ、浅間、さん。玉、ちゃんから、伝、言」

声の主である鈴は目が見えない代わりに、聴覚が非常に鋭い。それは他人の微かな呟きでも理解できるほどだ。

いくらオリオトライでも気づくことは出来ないだろう。多分。

「動き、抑えるから、おねが、い。だって」

「Judge」

*

母さんの持つ神格武装『筆しらべ』の制御に使う筆は帝の持つ三種の神器にあやかっている。剣、勾玉、鏡そして筆。この四つに形態を変化させる事が出来る珍しい神格武装。出力が低いが私の筆にもその力が宿っている。

そんな神器と筆しらべを使い先生と刃を交えながら、圧倒的な差を感じてる。

斬り払い。弾幕。防御。中近距離を維持しながら攻撃を浴びせても、先生はその全てを長剣と身のこなしで交わしていく。それに対し、画龍で足場を整えて一閃の斬撃を放っていく。

「相変わらず異常な戦闘力……！」

放たれる斬撃重視の長剣は重く鋭い。以前から個人的に喧嘩と称した訓練をしている私でも勝てたことは一度もない。たとえ策を講じても私の動作と動作の間にタイミングを合わせて放ってくるのだ。

今も連結した勾玉を長剣の柄と地面に打ち込むことで動きを制限したが、それを支柱に右の腹に蹴りを打ち込んでくる。それを鏡で防げば、拘束の解けた長剣を掴み振り下ろされる。腹にくる蹴りの勢いを利用して横に飛びそれを避けると、先生との距離は数メートル開いてしまった。

「防御だけじゃ何も出来ないわよ。じゃあね」

笑いながら長剣を担ぎ直し、速度をあげる背中に向かって勾玉を速射して叫ぶ。

「アサマチーっ!!」

*

「会いましたっ!」

玉の声と同時に浅間は一撃を放つ。矢に巻かれた術式符は簡易的な結界を作り出すもの。それは何かにぶつかる事でその周囲五メートルに結界を張る。本来なら怪異を固定するのに使うそれを玉の放つ勾玉に向け放った。

結果としてオリオトライと玉の周囲に結界が形作られる。

玉の戦闘が続くのだ。

*

「成長してるじゃない。アンタも浅間もね」

直立のまま長剣に手をかける先生。こちらから近づけば一発でホームランだろう。

勾玉を筆に戻し、筆しらべの用意を整えながら考える。急造の結界ならオリオトライが長剣をフルスイングすれば壊れる可能性もある。

……多分三回振られたら壊れるだろうなあ。

どちらにせよ、先生の移動を阻止できている今は日頃の成果を見せるアピールポイントだ。

身体強化の術式は継続中。筆しらべに使う流体も十分にある。

「行きます」

「宣言するなんて随分と余裕ね」

筆を構え前を向く。視線の先で笑う先生の長剣が握られる。

瞬発する。加速が始まり、筆先に墨が集う。

『霧隠』

「ーっ」

その名を聞いた先生の目が見開く。

目前に『』を描いた途端、結界中に甘い匂いと紫煙が漂い始める。

空間に作用する『霧隠』の筆しらべ。それは万物を時の狭間で惑わせる強力な力。その反面、消費する流体量も膨大で、私には四秒しか継続する事ができない。

完成形ではない私の場合は運動速度を遅くするだけだが今はそれで十分。

変化した剣を両手で構え、確かな踏み込みと共に加速する。

先生が長剣を振り下ろそうとする。しかし、その動きは格段に遅くなっている。普段なら、その速度から見えることの無い太刀筋もはつきりと認識できる。

ーっ勝てる。

精度を上げるため見据えるのは、腹部中央。勝利の確信を得て突き刺した。

*

結界の内側から何かが飛び出して品川方面へと飛んでいくのを浅間は見た。

*

化け物だなあ。

人の体であんな挙動は不可能な筈だ。だが、矛盾許容の世界で不可能という言葉は意味をなさないのだろう。

私は思い出す。数秒前の異常な光景を。

*

刺突が刺さる直前。突然、右から強い衝撃が体に浴びせられた。先生が振り下ろそうとした長剣が何故そこにあるのか。その答えは単

純だった。

振る方向を変えたのだ。それも私の勢いに重ねて結界を壊すように、だ。

……確かに長剣を振る速度は低下していた。なのに、どうして。「アンタの霧隠は出力があまり高くないんだから、その出力を上回る物には意味をなさない。だから、全力で殴っただけよ。その分、片腕やっちゃったけどね」

「このリアルアマゾネスっ!!」

なんて馬鹿力だ。

砕けた結界から先生が飛び出る。霧隠も消え去り、点蔵達もまだ追いつかない。魔女組や浅間といった術式系でも、有効打にはならないだろう。

……また、勝てなかった。

筆しらべの力をもっと活かす方法を考えていかなければ、先生に一撃を入れることは叶わないのだろうか。

攻撃の威力で上空へ飛んでいた体も、今は品川方向へ下降を始めている。眼下では梅組の放つ術式光が見える。反省と皆の奮闘を祈りながら、私は品川の建物に墜落した。

三章 事務所前のガチ殴打

* 玉が品川に墜落する様子を、中央前艦の展望台となっている場所から望む者がいた。

周囲の掃除を重力制御でこなす武蔵の背後に一人の人影がやってくる。

「朝からお掃除とはさすがだねえ」

やつ、と手を挙げて来るのは中年の男。武蔵は彼に視線を向けず応じた。

「そちらこそ、こんな所でサボりとは良い度胸だと判断できますー以上」

「それを言うなら、武蔵さんだって半ば授業参観しているよね」

そう言つて、男が品川に指を向ける。その先にあるのは艦首側の暫定居住区の一部。周辺住民が撮影した写真には、黒塗りの貨物庫を改造した建物の屋根が写されており、大きな孔が開いていた。

……玉様ならば問題ないと判断できます。

統計的に結論して、武蔵はふと一息をついた。

「酒井様。私はサボっているのではなく、武蔵総艦長として住民の安全確認をしているだけですー以上」

「……分かったからさ。そろそろ、その箒をこっちに向けるのは止めてほしいな」

酒井の周囲には、数本の箒が重力操作で首を狙って浮遊していた。

* ……面倒なことになった。

オリオトライのフルスイングで飛んだ先にあつたのは、本来の目的地である事務所だった。そんな所に上から人が落下してきた場合、大多数の人間が慌てふためくだろう。それは目の前の人物たちにも当てはまっていた。

「おい、上から人が降つて来たぞ」

「あ、ああ。俺の見間違いないやなかったんだな……」

赤色の四腕に頭には二つのホーン。人間よりも遥かに大きな巨体を持つ二人の魔神族がこちらを見ている。

とりあえず、敵意がないことを伝えなければ。こちらに向かっているアマゾネスは敵意ありまくりだけだ。

「えーと。ちよつと盛大にホームラン食らっちゃって、飛んできました。喧嘩とかはする気ないんで」

失礼します、と入り口を探そうとした瞬間。二人の魔神族の向こう側から足音が聞こえた。

「お前、あの時いっしょにいたガキだな。けっこう好みだったから、珍しく覚えてるぜ」

「兄貴、ロリコン極めてるっすね」

やめろ馬鹿。

だが、『兄貴』と呼ばれる声には聞き覚えがある。そう、オリオトライと焼肉に行った日に聞いた声だ。振り向くと、出入口にはひとときわ大きな魔神族が立っていた。他よりも太く力強い腕から、そのパワーが並大抵のレベルではない事が伺える。

「そうだけど。……見逃してくれるの?」

「な訳ないだろっ!!」

剛腕が勢いよく振り下ろされる。それを正面へのステップで避けて懐に潜り込む。眼前で空いた胸に手のひらを出し、狙いを定める。

『神獣鏡』展開」

開いた五指の先に黒い球体が形成される。

『画点』

「ぐはっ!」

黒球が胸に触れた瞬間、頑丈な魔神族の肉体があっけなく吹き飛ばされる。巨体はそのまま壁をぶち抜いて外に放り出された。

「おい、嘘だろ……」

「兄貴!!」

それを見た二人の魔神族が口を開けて呆然としている。

……案外なんとかなるもんだなあ。

先生との訓練による影響か、相手の評価が世間一般とずれている気がするが気にしない事にした。

*

オリオトライの眼前には梅組の面々が息も絶え絶えな様子で座っている。

あの後、玉が脱落してからはマルゴットやナルゼの射撃を行われたが、オリオトライはそれらを潜り抜け品川までたどり着いていた。

しかし、ペルソナ君に担がれていた鈴を除いて、梅組はほぼ全滅だった。

「まあ、生存一名に脱落者は玉以外助けられているし上出来ね」

「あの、玉さんは……？」

ああ、とオリオトライが後ろを振り向いく。それに釣られて皆が顔を向けると、黒い事務所の壁を破壊しながら巨体が飛び出してきた。赤い巨体に頭部のホーン。オリオトライが話していた地上げ業者だった。

一体誰がやったのか。騒ぎを聞きつけてやってきた観衆も含め、皆の疑問に答えるように空いた壁から梅組のよく知る人間が出てくる。

「玉さん!？」

*

皆の視線を横目に、倒れ伏す魔神族を撮影術式で撮影しておく。

「あの、何やってるんですか?」

皆の疑問を集約した浅間からの問いに、イツスンに撮影をさせたまま答える。

「何って。松平元信公に頼まれた情報収集と同人誌用の素材撮影だけど」

「「さも当然のように答えやがった!!」」

そんな受け答えの中で、オリオトライが一息を吐いた。

「あんたがコレやったって事でいいのかしら」

先生からの質問に頷く。

「Jud. 吹き飛ばされて着地したのがここだったからー」

「待ちな!!」

背後から叫ぶ声。その声の主はさっきの魔神族二人組だった。

その姿に彼女は嬉しそうな表情をした。そして長剣を手に取り、顔だけを梅組に向ける。

魔神族は標的を定めて、突撃を開始した。

そして、未だその意図をつかめない皆を置き去りに先生は言った。

「今から実技をします」

*

魔神族はその巨体と筋力もさることながら、大きな特徴を持っている。それは体内に流体炉に似た器官を持っていること。その器官から得られる内燃排気の獲得量は目を見張るほどのレベルがある。

そんな彼らの肉体は重装甲並みの強度を持ち、筋力も軽量級の武神と戦えるほどである。

「でも、そんな魔神族にも弱点があるわ」

それは生物が持つ大きな弱点。生物の頭蓋とその内部にある脳。頭蓋を揺らせば内側にある脳も振動することで脳震盪が起こる。

それは魔神族も例外ではない。特に頭部のホーンは大きな狙いだ。

「このホーンの先端。その曲がった角に引っ掛けるように打撃する」
「ぐっ……」

振るわれた一撃は正確にホーンを打撃した。オリオトライの驚異的な膂力から放たれた打撃をまともに受けた事で、力なく魔神族の体が倒れ込む。

それでも内燃排気を用いて回復しているのか、指に力が入っている。

そんな魔神族を見下ろすように、オリオトライは長剣を振りかぶる。

「ここで油断しちゃダメよ。回復させる隙を与えずに、ちゃんと対角線上をぶん殴るっ!!」

躊躇い無く放たれた二撃目によって魔神族は完全に意識を失った。

それを見ていた残りの魔神族が仲間を引きずって建物へと逃げていくのを横目に、オリオトライは笑顔で生徒の方へと振り返る。

「それじゃあ、今から皆にもやってもらおうよ」

さも当然と告げるオリオトライの眼前に玉が立ち、梅組の方へと手を下から上へさん、はい、と振る。

「出来るかあ!?!」

「おいおい。皆してどうしたんだよう。」

突然聞こえた声に皆がそちらを向く。

その視線の先にいたのは、紙袋を脇に抱えた少年だった。一見すれば普通の学生だと思えるだろうが、紙袋から見える箱には『ぬるはちつ！ R元服』と書かれている。

*

葵・トリー。武蔵アリアダスト教導院の総長兼生徒会長である彼がこちらに近づいてくる。

それに合わせて周囲の観衆がぞろぞろと道を開ける。

「あれが総長兼生徒会長か」

「ああ。聖連からせい『不可能男』なんて字名を貰ってる」

「……てか、なんでエロゲ持ってたんだよ」

観衆の眩きを聞き逃さず、彼らにちよつかいを出しながらトリーがやって来る。

そんな様子を見て唾然とするのが多い中でオリオトライは拳を震わせ、玉は大笑いしていた。

「あつははははは。トリー、それって泣きゲーでしょ」

「お、玉じゃねえか。お前は並ばなかったのかよ。点蔵の親父は店舗別特典まで集めに忍者走りしてたのに」

玉の笑いに答えながら立つトリー。その肩に後ろから、オリオトライが無言で手を置く。トリーはそれに気づき後ろに振り返りながら、「なんだよ先生？ そんなマジ顔しているとモテないぜ。まあ、悲しかったら俺も玉も焼肉に付き合うからさ」

「なんで私まで付き合うの確定なのよ」

「そりゃあ、玉と先生の付き合いが長いからだろ。IZUMOの時から付き合いなんだっけか」

「Judge. 先生はあんまり話さないけどね」

玉の方を指さして笑うトリーリの言う通り、オリオトライと玉は武蔵乗船前からの付き合いがあった。それは彼女たちの関係者達も知っている。ただ、咲とその当人達によると、当時の関係は今と大して変わらなかったらしい。

そして、オリオトライの空気が少しずつ変わるのを感じ取った周囲の人間が後退を始める。

握られた拳に力が入る。姿勢を変えてキレのいい一発を放つ準備をするオリオトライに、顔を玉へと向けるトリーリは、それに気づくとなく話を進める。

トリーリ越しに玉もオリオトライの様子に気づくが、その拳はすでに解き放たれようとしていた。

「どうせIZUMOでも肉ばっか食ってたんだぜ。先生はもつと野菜を食った方がー」

「馬鹿！ それ以上言うな!!」
一撃。

「わー!! 急にエロゲ持った学生が中に!?!」

玉の言葉も届かず、トリーリに突き刺さった拳は振りぬかれた。もろに食らったトリーリが魔神族の事務所に突っ込み、中から悲鳴が聞こえる。

そんな中で、事務所の中からトリーリの声が響く。それは梅組の面々に届くほどの音量をもって告げられた。

「俺、明日告りに行こうと思うわ」

「ーえ?」

トリーリが告げた内容に一同は困惑を隠せないまま、時が過ぎていった。

四章 不穩への参入者達

トリーリの告白宣言を聞いた大半の人間がようやく内容を理解した頃、まっさきに反応を返したのは姉である喜美だった。

乱れた髪を直しながら首を傾げ、

「あんた、急に出てきて告り宣言とか一体どういうワケ？ 誰にするの？ 賢い姉に説明しなさい！」

賢いのに聞くのか。

その疑問を胸の内にとどめて、トリーリの返答を待つ。

やがて、事務所から戻ってきたトリーリは喜美からの質問に頷き、答えた。

「そりゃあ決まってるよ。つーか、皆も知ってるだろ？ ホライゾンだよ」

その答えに、私だけでなく一同は静まり返った。トリーリが告げた人名。それは、

「馬鹿ね。ホライズンは死んだのよ。……あんたの嫌いな『後悔通り』で」

そうだ。ホライズンは十年前に亡くなっている。それはこの場にいるほとんどの人が理解していること。ましてや、その場に居たトリーリ自身が忘れる筈もないだろうに。

……でも、トリーリの眼は真剣だ。

それを示すようにトリーリが口を開く。

「分かってるよ。ただ、その事からは、もう逃げねえ。皆に迷惑かけるだろうけど」

そこに言葉を挟む者はいなかった。誰もがトリーリの言葉に耳を傾け、その先を聞こうとする。

「だからさ、明日告ツてくる。……彼女とは違うのかもしれないけど、色々考えたからさ。もう逃げねえ」

その台詞に喜美は微笑みを浮かべ、

「なら、今日は色々と準備の日ね」

「そして、最後の普通の日、ってわけ？」

台詞盗るんじゃないわよ、という喜美の言葉はスルーした。
これから色々あるんだろうな。トーリの宣言から、そんな単純な考えを持ちながら私はその場を離れた。

*

青雷亭の前には一人の自動人形がいた。P—O—1—sと呼ばれる彼女が、側溝に居る黒藻の獣と会話するのを咲は店主と見守っていた。「珍しいわね。黒藻の獣と仲良くするなんて、あまり出来ることじゃないわよ」

「はは。それがあの娘の良いところじゃない。まあ、体自体が珍しかったわけだけど」

店主が吐息を漏らすのを横目に、その理由を思い出す。

……たしか、技術屋が彼女の体を調べたのだったか。

「結果は『よくわからない』だったっけ」

「そう。なんでも、I Z U M Oや英国の流れが見えるけど、どうにも不明瞭なんだってさ」

そんな店主の呆れ顔について頬がゆるんでしまう。それは彼女が迷惑だと思っているようでは無いから。彼女の優しさなら、あの娘を大事にしてくれるだろう。

「なに笑ってんだい？」

「いや。あのボディを作った人間は相当な変人だと思ってね」

そうやって荷物をまとめだす咲を見て、店主が怪訝そうな顔をする。

「あんた、その荷物どうしたの。誰かへのお土産？」

そうやって指し示すのは、咲の隣に置かれた長方形の箱。普段荷物を持ち歩く事のない彼女が今日は珍しく荷物を持っている。

しかし、咲はそれに答えず扉へと手をかける。

「それは秘密。今夜あたりには教えてあげるから」

そうやって咲は外へと出ていった。

それと入れ替わるようにP—O—1—sが店の中を覗き込む。

「店主様、いつも通り正純様のご来店です。ぶっちゃけ言うとう、餓死寸前です」

*

玄関を通ると、ほのかに茶の匂いが漂ってくる。

その出処の居間に入ると、母さんが茶を注いでいた。

授業中に着ていた制服を脱ぎ捨て、白地に赤の文様をあしらった衣装に袖を通す。

これは昔から甘上一族に伝わる伝統衣装で、母が子の為に手作りする物。教導院の初等部に入学する時に母さんが手渡してくれた物だった。

椅子に座れば、淹れたての茶が目の前に置かれる。それに口をつきつつ、対面には母さんが座って同じように茶を飲んでいる。

本来なら教導院で授業を受ける時間にも関わらず家に戻っているのには理由があった。

それは松平元信公からの依頼。物心ついた時には既に依頼が来ていて、母さんは私を浅間神社に預けて各地に赴いていた記憶がある。

「さて、三河に行くまでに時間もあるから、少しお勉強ね」

「……え」

……why?

突然のことに英国弁が出てしまう。

「さつき元信公から通神があつてね。酒井学長たちと行くことになったの」

「それで?」

「だから、余った時間を勉強に当てるのが学生でしょう」

そう言つて笑う母さんと違い、私は心の底から元信公に不満をかんじるのだった。

*

それから時が経ち、昼下がりの陽光に照らされているのは、三征西班牙の赤い制服を身につける二人の学生だった。

「凄いですね。あそこの集団」

そう言つて、年少の学生が関所へ向かう道を示す。それに年長の学生が応じ、声を漏らす。

「おお、こんな所で見るとはな。武蔵学長に武蔵副会長、神格武装の所

持者にその娘か」

「T e s . 神格武装を持つ甘上家の当主もそうですけど、その娘の甘上玉も相当です。なんでも朝に空を飛んでいたとか」

「マジかよ。でも俺、玉さんのエロ草子好きなんだよ。最近出た新作も良くてなあ」

「先輩、エロの話だと饒舌になりますよね」

「そう言うなよ、と言って警備に戻る年長に呆れながらも、己も仕事に戻るのだった。」

*

予想外の授業を終えて、酒井学長らと合流した私達は三河へと向かっていた。

時折、道に行く荷車を手伝いながらも三河へと近づいていた。

「それにしても、君たちまで一緒だとはね」

「しよがないですよ。元信公からの依頼ですから」

酒井学長の疑問に笑って答える母さん。そんな二人のやり取りを正純と並びながら見ている。

「元信公からの依頼……そんな事があったのか」

「Judge . 随分と前からね。最近は私も一緒」

そんな少し遠慮がちの正純を横目に、母さんの動きを観察する。普段通りの会話をしているが、神格武装の使い手だろうか。その動きには周囲を警戒するような素振りが見えた。

「地脈炉の稼働で三河は怪異の多発地帯。何が起こっても不思議じゃないのよね」

「その通り。午前中の授業をよく覚えていたわね」

「だけど、そんな三河君主と独自のパイプがあるって、聖連が聞いたら怒りそうだねえ。一体どんな関係なんだい？ 三河と甘上家って」

そんな興味津々といった視線を母さんは笑いながら受け止めた。まるで、子供を諫めるように。

「それは、今日の夜にでも」

「そうかい。じゃあ楽しみにしているよ」

そう言って酒井が口を閉ざすのとは反対に、正純が口を開ける。

「あの、咲さんは大罪武装は人の感情を材料にしているって噂があるのはどう思ってるんですか？」

それは私も聞いたことがある。P・A・O・D・A以外の聖譜所有国に配られた大規模破壊武装である大罪武装。それは名の通りに人間の感情を材料にしているという噂だ。

私は別段、有り得ない話ではないと思う。なぜなら、この矛盾許容の世界ではそんな事もできるだろう。

皆が目を向ける咲は振り返って言った。

「感情っていうのは計り知れない物よ。嫉妬も喜びもね」

そのあとも会話は続きながら、四人がそれぞれの予感を得ながら三河へと入っていく。

五章 次代の受け継ぎ手

三河中心部に位置する新名古屋城。周囲に三河の街を置くその背景の前に、三つの影があった。

中年を過ぎ細い男と、同じ年頃で体つきのいい男。その後ろに控えるのは一人の少女。

大柄の男は松平四天王の一人で、神格武装『蜻蛉切』の使い手である本多忠勝。細身の男も松平四天王の一人、榊原康政である。

そして、彼らの向こうから三人の人影がやって来た。

「いやあ。まさか松平四天王の二人がお出迎えとはね。俺も満更じゃないってことか」

「でも、井伊さんがいませんね」

咲の言葉に榊原がわずかに顔を上げる。彼は髪をかきあげながら、

「実は咲さん。井伊君は——」

「榊原。それは他言無用だ」

榊原を手で制し、代わりというように忠勝が前に出る。

「見せろ」

忠勝が言うが早いか、背後に控えていた少女の姿が消える。

「玉」

次いで咲が名を呼ぶと同時に、酒井の背後に三つの円弧を描く影が来た。

一つは少女の結んだ髪が描く円軌道。

もう一つは、抜かれた刃の軌道。

最後に、酒井と少女の間に描かれた墨の軌道。

三つの円弧が重なり合い、動きが生まれた。

*

焦りから直線を描けなかったが、一閃の術式が発動したことは目の前の状況からも確認出来る。

酒井の背後から狙った初撃は一閃によって弾かれた。そこから間合いを取って私と対峙するのは一人の少女。名前は本多二代。本多忠勝の娘で、それ相応の実力を持っているのだろう。彼女の話は三河

に寄る度に聞いていた。そんな彼女の手には白砂台座のブランドと
思しき刀が握られている。

術式頼りの私にとって鍛えられた剣術は脅威だ。しかも東国無双
の剣術なら、なおさら筆しらべだけでは不利になる。

だから、一度筆を握り直し唱える。

「飛べ『足玉』」

たるたま

手中の筆が勾玉形態へと変化し、私の背中に円を描くように待機す
る。

槍に対して勾玉形態は連結して鞭のように動かしたり、連射するこ
とで牽制も出来る。

その効果は確かなようで、一閃によって初撃を弾いてからは間合い
を詰めていない。

「来ないなら、行かせてもらおうよ」

「くっ」

足玉の装填数は六発。そのうち三発を少女の足元へ放つ。撃ち込
まれた地面は砂埃を上げて視界を封じる。

「疾風」

待機させた足玉を一度戻し、疾風の印である？を描く。

「これは、周囲の埃が巻き上げられているので御座るか」

二代が声を上げる。周囲をつむじ風が襲い、私の姿は見えないだろ
う。奇襲攻撃ならば二代と言えど、無事では済まない。

だからこそ、砂塵が舞うこの隙を使って距離を縮める。

でも、それでは不十分だ。

二代へとまっすぐに駆け出したまま、周囲の木々へ墨を放つ。筆と
木が墨で繋がれたのを確認して、穂先を二代の立つ場所へと向けてお
く。

「甘いで御座る」

砂塵が収まり始め、影が見える。

正面に見えるのは点のシルエツト。

「いくら視界を塞ごうと、近づけば気配を読めるで御座る。単純な奇

襲など拙者には——」

私が突っ込んでくることを予想した刺突。

さすがは東国無双である忠勝の娘。視界が悪くても攻撃を撃ち込んでくる。

狙い済まされた一撃は確実に頭部を貫くものだ。

しかし、

「——っ!?!」

二代の攻撃が動きを止める。

砂塵が収まり、見えたのは四肢を蔦によつて固定された二代の姿だった。

「桜花・葛巻。単純な奇襲なんてウチの担任には通じないのよ。だから、筆しらべを活用させてもらったわ」

己より強い剣の使い手。私が真っ先に考えたのはオリオトライだった。そして、相手の力量はオリオトライを目安に考えるべきだと思っただ。

もしオリオトライならば一つだけの仕込みは通じない。自分の持つ物を全て活用しなければ結果が出せないのは知っていた。

「卑怯とか言わないでよ。最初にしかけたのはそっちなんだから」

「……Judge。」

二代が悔しそうに拳を地面に打ちつける。

それを横目に私も筆しらべを解除して母さんの元へ戻ることにする。

子供たちの戦闘を眺めていた一同は口の端を上げて、会話を楽しんでいた。

「やはりまだまだか」

「玉も剣で挑めばよかったのに。つまらない」

「ていうか、友人に娘けしかけるってどういうことだよ」

榊原を除いて、三者三様の意見を交わす。その様は授業参観に来た保護者だ。

その中で、榊原が私に気づいて手を上げる。

「お疲れ様です。お二人には殿から呼び出しが掛かっています。花火

が始まる前には来て欲しい、とのこと。もうそろそろ、向かった方がいいと思いますよ」

そう言つて示すのは、三河中心部に聳える新名古屋城。陽光に照らされたそこに元信公がいるのだろう。

「お。じゃあここで咲さん達とは一時お別れか」

「酒井。俺達は食堂行つて飲むぞ。二代もついて来い」

「Judge」

ひらひらと手を振る酒井の首を掴む忠勝さんと苦笑する榊原さん。

三人と離れて新名古屋へと足を向ける母さん。

「それでは、また後で」

「ああ」

忠勝さんと挨拶を交わすその顔には、ほんの僅かに陰りが見えた気がした。

*

酒井達と別れてやつて来た新名古屋城。四方の地脈炉四つと中心の統括炉。元信の命令でそれらを暴走させている現場には、暴走によつて地下から鼓動が響きつつある。そして、その周囲を覆う堀に掛かる橋の上。

傾きつつある陽を浴びながら、そこに咲と元信が立っている。

「久しぶりだね」

「ええ。先生もお変わりないようで」

先生、と呼ばれた元信が振り向く。夕日に照らされたその顔には笑みが浮かんでいる。

「三十年前。私達が出会つてから今日までたくさんの教材を作つてきた。その結果が出るのは今日からだ」

感慨深く頷くと、そうだと咲に尋ねた。

「玉君は元気かい？」

「Judge. あの娘も充分成長しましたよ。今は眠らせていますけどね」

そう言つて背中に抱えた玉を見せると、元信の笑みが増した。先生というのは他人の娘でも次世代の成長が嬉しいのだろう。

『元信公、予定通り開始しました。そちらは?』

咲と元信の間に表示枠による通神が開かれる。そこに映るのは忠勝に仕える自動人形の鹿角だった。

「どうやら、三河の花火の準備に入ったのだろうか。」

「予定通りだ。祭りがバレるのは八時過ぎだろう。咲君も今からだろう?。」

「ええ。今日が限界でしょうけど、忠勝さんの方には間に合うと思いますよ。」

「それじゃ頼むよ。どんな時だって子のことを考えるのが親だからね。」

その言葉は彼自身が親だからだろうか。あまり見ることの無い優しさのある言葉だった。

「それじゃあ。こちらも始めます。」

「……ああ。気をつけてくれ。私も統括炉に向かうよ。」

元信が統括炉へ入り、その扉が閉まるのを見届けてから服の乱れを直し、手元に表示枠を出す。表示されるのは筆しらべの調整用や玉のバイタル。

それらの表示枠を操作しながら玉を地面に寝かせておく。

「イツシヤク。イツスンと術式の受け渡し設定と筆しらべの所有者権限の移行準備をお願い。」

『やる気か?』

「ええ。」

呼び出したイツシヤクに表示枠いくつか渡して作業を続ける。

「筆しらべ起動。筆神による神界の擬似展開を開始。転移対象は甘上玉と甘上咲の二名。」

『玉のバイタルは安定してる。筆神の出力も大丈夫だ』

「分かった。消費する流体は地脈炉の余剰分と私の内燃排気で賄うわ。」

咲が行おうとしているのは筆しらべの譲渡。そのためには、玉が甘上一族の後継者として認められる必要がある。

本来ならば時間をかけて行うことだが、ある理由から咲にそこまで

を見届ける時間は存在しない。

そして、筆しらは筆神という特殊な神との契約によって成立する術式。彼らは他の神々と違い甘上一族とのみ契約を交わす存在。

だからだろうか、彼らは他の神とは違い神界とは異なる場所にいる。

そこへ向かい、彼らの前で玉が後継者に相応しいことを示せば筆しらべの譲渡はすぐに済むと考えた咲は、玉と共に転移することを決めた。

表示枠を操作する咲の前に新しく一枚の表示枠が現れる。

【対象の転移 実行／中止】

転移することを確認する表示枠。傍で作業を続けるイツシヤクがこちらを見て叫ぶ。

『準備完了だ。流体も基準値を越えた。いつでも行けるぞ！』

「Judge. それじゃあ、行ってくるわ」

イツシヤクからの問いに答えるように、表示枠の【実行】を叩く。

【転移 実行】

表示枠が砕け、散る光が咲と玉を包んでいく。やがて視界が白く染まり、身体が浮遊する感覚に襲われる。

とうとう、咲と玉の転移が行われていくのだ。

第六章 筆の操り手

目を開いた玉が見たのは、彼女の知る世界とは異なる景色だった。空を流れる雲。穏やかな風の流れ。遠くの山々。そういった自然の流れが墨で描かれている。

……まるで筆しらべね。

そして最も違和感を感じたのは周囲に漂う気配だった。人や怪異が放つものではなく、それよりも強い圧を感じる。

筆しらべを扱うことから一般人よりも接する機会が多いが、それでもここまでの圧を感じたことは無かった。つまるところ、ここには神々の気配が周囲には満ちているのだ。

そんな場所を玉は一つしか知らない。

「ここは神界なのね」

*

確認するように呟いた言葉と共に、周囲に流体の流れが生じるのを玉は感じた。

……これは、筆しらべ!?

「爆炎」

その一言を合図に、∞の文様が浮かび上がる。それと同時に巨大な火球が形成されていく。

正面十メートル程の位置。陽炎を伴うそれが一直線に玉へと加速してくる。

「っ疾風ー」

迫り来る火球と玉の間に突風が発生する。風が火球を逸らし勢いを削ぐ中、風と炎の間から私は見た。筆を持ち、こちらへと明らかなき殺気を飛ばす母さんの姿を。

*

咲は心の内でため息をついていた。

自らに与えられた時間の少なさを理解しているつもりだった。それでも、目標達成には至らなかつた。

「時間はあまり残されていないの。だから、ちゃんと学んで」

多くを語る時間はない。その事実を認識しながら、娘へと最大限の殺気を放ち突進した。

*

「油断しないでね」

「——っ」

突如として眼前に現れた母さん。その言葉に答えるよりも先に、高度が上昇する。

下を見れば地面から数本の大木が生えているのが見える。その中の一本に乗せられ視界はさらに上がっていく。

そして眼下の母さんが腕を伸ばし手を開く。そこから放たれるのは勾玉。それも、足玉より強力で数の多い八尺瓊勾玉と呼ばれるものだ。

青と白の軌跡を描きながら飛んでくるそれらに筆を構える。

「払え」

筆を横に振り払えば、一閃によって木々が切断されていく。数十の丸太は重力によって下へと落下を始める。それらは八尺瓊勾玉、そして母さんへと加速を始める。

「紅蓮」

「しまった……！」

落下を続ける丸太へと龍のように猛火が襲いかかる。その根元は最初に衝突した火球と突風によって飛び散った火の粉。それを紅蓮の筆しらべによって母さんは操ったのだ。

そして火龍は丸太を食らいつくし、こちらへと襲いかかってくる。

「なら、火種を消すしか」

風で逸らしてもさっきの二の舞だ。ならば、火種が残らないようにしてしまえばいい。

「恵雨」

迫る龍へ向けてΠを描く。途端に遙か頭上から恵みの雨が降り注ぐ。その水は龍に喰らわれて蒸発するが、しかし蒸発を免れた雨は地上に残る火種を消していった。

根元を潰された龍が断末魔を伴って消えていく。

「油断禁物」

地上からこちらを仰ぐ母さんが笑う。

「まさかっ!?!」

視線を真横へ向ける。そこにはこちらへと迫り来る八尺瓊勾玉があつた。

まだ数メートルの距離がある勾玉が光を放つ。八尺瓊勾玉に宿る冷気が漏れだし、周囲の雨を凍りつかせていく。

「捕まえた」

「――」

視界の全てが尽く固まった。

七章 危険からの逃亡者

体中を氷が覆っていく。四肢は既に固定され、辛うじて顔を動かせるだけの私に母さんが言う。

「まだまだ経験が足りないわね。やっぱり私が手ずから教えるべきだったかしら」

「まだ、負けてないっ!!」

負け犬の遠吠えに聞こえるそれを、母さんは笑って受け流す。筆を操ることのできない私にはもはや何の攻撃手段もないと思っっているのだろう。

だが、

「イツスン。思いつきりお願い」

『任せな』

首横のハードポイントから飛び出たイツスンが腰の一刀に手をかける。

『みじん切りだ。電光丸』

電光丸。イツスンの持つそれは甘上一族の走狗が扱う特別な刀だ。伝承に拠れば、世界を隔てる壁をも断つことが出来るという一刀。そんな太刀筋が四肢の氷塊を削りきる。そしてそれに待ったをかけるように母さんが筆を構える。

……今のままじゃ勝てない。なら、ここから抜け出す手段を考えなきゃ。

「また氷漬けね。氷嵐」

描かれるのは*。それは吹雪の発展系氷嵐。尽くを氷の牢獄へと閉じ込める筆技。その威力は言うに及ばず。喰らえばひとたまりもない。

そして迫り来る勾玉も無視出来ない要素。

「ならー」

懐から取り出すのは豪勢な装飾を持つ三枚の札。浅間神社と共同で開発した破魔札であるそれを、掴み放り投げる。

「いつの間になんな物を」

「今日は教導院でバカ騒ぎするってウチの馬鹿が言ってたから、その余興にね」

……ごめんトリー。ちよつとバカ騒ぎ出来そうにないわ。

その代わりに、成すべきことを成すだけ。その思いを胸に、破魔札が炸裂する。

*

「ホント、子供は創意工夫でなんでもできるみたい」

大破魔札の炸裂によって氷嵐の筆しらべの発動を阻害された。その事実を認めた咲は、視線を空中に咲いた爆煙から動かさない。

もしも上空から急襲をするならばすぐさまにカウンターを打ち込むだけで十分だからだ。

「来る」

煙の中から光が漏れる。おそらくは飛び道具の類だろう。なら、それを避けて根本に攻撃を仕掛けるだけで終わり。

そう思い構えた手をふと、止めた。

「違う。これは——」

「画点」

体を見えない多重の突きで抑えられる中で、咲は娘の狙いを悟った。

「こじ開けて、イツスン——!!」

煙の向こう側。こちらへと筆を向け画点を放つ娘の更に向こう。彼女の走狗が空中を刀で斬りつけていく。

「全く……。全力で逃げるなんて嫌われたわね」

「突然親に閉じ込められたら誰でも逃げるわ。次はちゃんとした場所で教えて貰えると嬉しいのだけど」

呆れた様子の娘が向こう側へと歩き出す。そして、体を押しとどめた力が消えたのを感じる。

そんな娘の成長が予想よりも嬉しいのは、私が親バカだからだろうか。